

近世アジアの皮革 2. 中国の革製品

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

中国において服制が定まったのは後漢時代であり、皇帝から官吏にいたるまで冠と衣服、履物などが身分によって決まっており、素材として絹や皮革などが使用された。この制度は時代と共に変化したが、清時代まで継続した。モンゴル族の元朝は騎兵を主力とした軍隊を有し、その兵士の甲冑は主に革製であった。しかし14世紀後半に蒙古民族の元が滅び、漢民族の明の時代となり、火器の発達や西洋の影響もあり、鋼鉄製の甲冑が普及した。さらに清代になると、甲冑の重要性が低下し、革は甲冑としては使用されなくなった。しかし革は装飾的あるいは実用的な面から武具や生活用品などに使用されていた。

2. 履物

皇帝以下諸臣は祭事や儀式、執務に就くときに着用する服飾は規定されており、明

代の制度を記した「大明会典」によれば、皇帝は袞冕（礼服）には朱や黄の鞮（したくつ しとうず）と赤や黄の舄（くつ）、皮弁服（朝服）には白鞮と黒舄、武弁服（軍服）には赤舄、常服には靴、燕弁服（普段着）には白鞮と玄履を履いた（図1）¹⁾。文武官は公服に黒靴、常服に白靴を履いた。舄には爪先に絢と称する飾りが付いている。鞮は羅を以て為し、靴は皮を以て為すと記されている。舄と履の素材については記されていないが、古くは革製の二重底のものを舄と言ひ、単底のものを履と称した。靴と舄は筒の長い深履、履は筒の無い浅沓として描かれているが、同じ明代の百科全書と言われる「三才図会」では、舄は浅沓である²⁾。日本の漆塗りの烏皮舄（鼻高履）や正倉院の履も浅沓である（本誌 No. 143 P. 29）。一般の人々は革靴や布底で表地が絹や葉茎などの鞋を履いた。北方の人によく牛皮の長靴を履き、南方の人によく蒲の



図1 明代の履物
(左より赤舄、黒舄、靴、玄履)

葉茎で編んだ鞋を履いた³⁾。

清代では男子は皆靴を履いたが、将校は一般に脰の長い靴を履き、兵卒は脰の短い鞋を履いた。靴は古くから革製であったが、清代では緞子や毛織物、麻布も用いられた。鞋は底に布を重ねたものもあったが、大抵は牛皮を用い、甲の部分に縐子や紗、羅紗、綿布等を用いた。

満州や華北の農民が履いた烏拉鞋（ウラシェ）は牛皮を折り曲げて足のところを紐で締めた⁴⁾。中に烏拉草の干し草をいれて防寒用とした。北京の街には、種々の店屋が看板を出していたが、靴屋（靴舗）もあり、街頭では、靴を修理する皮屋もあった。このことは庶民も革靴を履いていたことを示している。

3. 被り物

「三才図会」には、革製の鞮帽、毛氈（フェルト）製の氈笠、帛製の帽子が載っており、鞮帽の頂部と縁（鏢）に獣尾が付けられている（図2）²⁾。庶民が被った帽子は6枚の帛を縫い合わせた椀形の六合一統帽（別名瓜皮の帽子、小帽）であり、現代にまで使用された。清代には葦製の夏用と羅紗製の冬用があり、後者の周りに毛皮、羅紗、ビロードを付けた⁴⁾。毛皮としては貂や獾、鹿の毛皮が使用された。儀礼用には帽頂に絹糸、毛糸、珊瑚、馬の尾が飾りとし

て付けられた。毛氈製の帽子は農民や商人、労働者など一般的に使用された。営兵の虎の頭に似た耳まで被る虎帽は革製であった⁵⁾。

明代の官僚が宮廷に出仕する時に、暖房用に暖耳（耳当て）や披肩（肩掛け）、風領（襟巻）をした⁶⁾。これらは貂の毛皮で出来ており、身分の高い者のみが許された。また女性は鉢巻状の臥兔児と称するものをした。これは貂や獾、海獺で出来ており、装飾と防寒を兼ねていた。中国で貂皮の需要が高まるのは明代中頃からで、暖耳などへの利用ならびに前号で述べた貂裘の着用などによる。清代の北京の様子を記した「燕京歳時記」には、禁城の諸大門の守衛らは貂褂の銀子（貂の毛皮の裏を付けた上着の購入金）を支給されるとある⁷⁾。

4. 革帯と武具

漢代の頃より衣服をまとうために腰帯が使用され、皇帝や文武官は素材に革を用い、皇后や女官は絹布を用いた。革帯には玉や角（犀、牛）が飾りとして取り付けてある。朝服や常服には蔽膝（膝掛け）や玉佩、綬が革帯に懸けられていた。唐代以降このしきたりは衰えたが、明代には復活した。北京定陵出土の玉帯は長さが146cm、幅が7cmであり、長くて広かった⁸⁾。皇后の礼服や常服にも玉革帯が使用された。



図2 明代の被り物
(左より鞮帽、氈笠、帽子)

清代になると朝帯や常服帯等は皮革を使わず絹織物製であったが、旅行用の行帯には牛皮が用いられ、それには飾りの石や物を掲げる環を取り付けてある。武官は弓袋や矢筒、刀剣を革帯に懸けた。

弓と矢を入れる袋（囊鞬^{こうけん}）は緞製または革製である。皇帝の大閱囊は革製であり銀絲緞で装飾し、鞬は銀絲緞製であり緑革で縁取りをしてあり、また大駕鹵簿^{たいがとふ}（皇帝の乗り物行列）囊鞬は共に革製で黒色であり縁が緑である（図3）⁵⁾。鹿皮の紐を用いて革帯に懸ける。矢袋は箱型であり、中世アジアの軍人を描いたペルシアの細密画（本誌No.162）の筒型とは異なるが、弓袋は類似している。弓の弦は一般的には絹糸であるが、鹿皮も用いられる。弓の鞘を紅い鮫皮で飾り、矢の括が当たるところを革で包んだのもある。皇帝や随侍の佩刀の鞘は木製であるが、それに緑革あるいは鮫皮を被せてある。漆を塗ったものもある。皇帝の乗り物は方形の箱に半球状の屋根が付いており、玉や象牙で飾られており、それぞれ玉輅と象輅と称されたが、戦場に赴く時には革が張られている革輅^{かくろ}に乗った。行列時に使用する槍は1丈ほどで先に3尺ほどの豹の尾が取り付けられていた。

5. 幕舎

清朝初期の康熙帝や乾隆帝は熱河（現河北省承德市）の避暑山荘で半年ほど過ごし、国事や外国からの使節団との接見を行い、また蒙古はじめ少数民族の代表らを招待して交流を図った。これらの行事を行う幕舎は一般に牛や羊の毛皮で作られ、絨毯を敷いた⁶⁾。王公のものは白羊の毛皮が用いられ、毛織物や錦の縁飾りが施されていた。大きな幕舎は1000人も収容できた。

皇帝の行列が休息するための幕舎や囲いの幕には白氈（白いフェルト）が使用された。

6. 楽器と影絵

楽器は周漢以来、木や竹、土、石等を用いて作られており、皮革も主要な素材であった。胡楽は西アジア・中央アジアからインド・ペルシャ系の音楽が中国に伝わり、南北朝を経て隋・唐の時代に隆盛となった。これに用いられた鞀鼓^{かっこ}や腰鼓^{ようこ}は唐代に日本に渡り、雅楽器として今日に至っている。18世紀後半から北京で演じられた京劇の歌の伴奏に絃楽器や打楽器、ラッパが使用された。絃楽器としては胡琴が中心的な楽器として用いられ、これは竹筒に蛇皮を張り、2本の絃を馬の尾の毛を張った竹の弓で弾

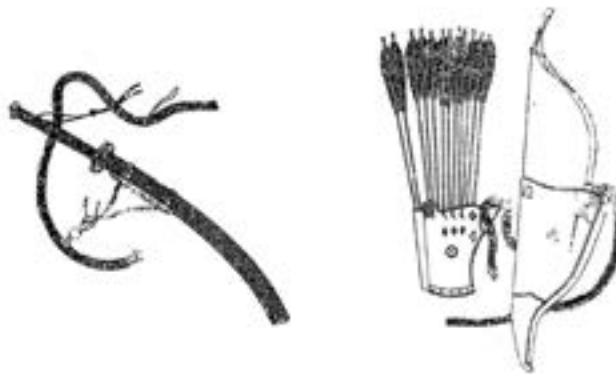


図3 清代の儀刀と囊鞬

いた⁴⁾。モンゴルの馬頭琴は木製の胴に馬の革を張り、絃は馬の尾毛である。打楽器としては銅鑼や太鼓があるが、太鼓には片面だけ皮を張った単皮鼓（小鼓）と両面を張った堂鼓（唐鼓 太鼓）がある。明代からの崑曲で主に用いられた月鼓は両面に皮が張っており、撥で打った。太鼓は鼓楼に置かれ時を告げた。中国では太鼓類は鼓と称されるが、「欽定大清会典図」には、種々の太鼓類が示されている⁵⁾。大鼓の面径は3尺6寸4分5厘であり、真中が細くなった杖鼓の面径は1尺2寸9分6厘である。胴が短くて径が1尺半くらいの面に龍や獅子の絵を描いた俳鼓や達卜、胴長で上下の面が異なる行鼓、鉄製の胴で上下の面径が異なる那嚨喇（ナッカール）等も示されている。

全国各地で行われた民間歌舞に用いられた太平鼓は扁平の単面鼓であり、鉄のたがに驢馬の皮を張った団扇形のもので、柄の下部に付けた鉄環と太鼓の音が調和していた⁷⁾。正月には子供が群れをなして打って新年を迎えた。

影戯（影絵芝居）は中国でもインドや東南アジアと同様に古くから行われており、漢代に起源があると言われ、宋代には盛んであった。宋代には羊皮を用いたとも言われている。清代では1791年に乾隆帝の80歳の誕生日に盛大に影戯が演じられた（図4）⁹⁾。19世紀後半から20世紀初頭にかけて全国的に盛んであった。北京の東北部灤州（河北省）で発達し、農民が農閑期に北京に出て上演した。薄く削った半透明の驢皮で人形を切り抜き、彩色して、桐油を塗り、これを操って布や紙の幕に上映した⁴⁾。人形の大きさは40cmであったが、水牛皮で75cmと大型のものもあった⁹⁾。上演の音楽には、銅鑼や鈸と共に鼓や太鼓も使用された。台湾の影戯は18世紀頃までには対岸の



図4 乾隆帝の影戯人形

福建省から伝わった。

7. 皮舟

川を渡る方法としては泳ぐだけよりも何か浮くものに掴まりながら泳ぐ方が安全であり、古くから木片や瓢箪、甕（あるいは壺）、皮袋等が利用されていた。メソポタミアでは動物の頭と四肢を切り取った胴体に空気を入れて膨らませた皮の浮袋やそれらを筏にしたケレーク（kellek）あるいは柳で作った骨組みに獣皮を張り、タールやピッチを塗って防水した円い籠状のクーファ（quffa）が使用された。

中国の雲南省やチベット地方では、プーナンという皮の浮袋が使用された。「三才図会」には、皮船は生の牛馬皮を以って作り、竹木を以って縁とし、箱形にし、之を火に乾かしてから水に浮かばせるとあり、さらに一枚皮では一人乗り、2枚縫い合わせは三人乗りができるとあり、碗状の形が描かれている²⁾。1900年の旅行記「チベット旅行記」には、シガゼに近いヤルツェンポ川（インド洋に注ぐブラマプトラ川の上流）ではインド風の長方形の船もあるが、少人数あるいは少量荷物の運搬用のヤク皮の船もあり、それは3疋の皮を縫い合わせ、

その縫い目に漆を塗り水に浮かべるとあり、半日ほどして湿気を帯びると、引き上げて乾かす¹⁰⁾。これは1人で背負うことができる。このコアと称する皮舟は1983年の旅行記にも載っており、それには4頭のヤクの皮をヤクの毛で縫い合わせて楊柳の枝の骨組に張り、縦2.5メートル、横1.2メートル、深さ0.6メートルの箱型であり、重さ56キロとある¹¹⁾。これが漁業に用いられたのは最近である。黄河上流では、牛や羊の皮の浮袋を少なくとも10個、多いものは4、5百個を規則正しく並べ木材で結んだ皮筏子（ピファーツ）という大型の筏が使用された。これは主要産物である羊皮や牛皮の輸送に使用した。

8. まとめ

服飾制度によって着用する服や履物が規制されており、革製の靴や帯が使用された。弓矢を入れる囊鞬も革製であった。幕舎には牛や羊の毛皮が使用された。舞曲の伴奏に胡弓や太鼓などの楽器が使用されたが、それらに皮や毛が使用された。影戯の人形には驢皮や水牛皮が使用された。皮舟や筏にヤク皮や牛皮、羊皮が使用された。

文 献

- 1) 李東陽等奉勅撰 中時行等奉勅重修：大明会典，新文豊出版（1976）P. 1017.
- 2) 王圻著，王思義編：三才図会，上海古籍出版（1988）P. 1136, 1534.
- 3) 華梅著 施潔民訳：中国服装史，白帝社（2003）P. 143, 165.
- 4) 青木正児編 内田道夫解説：北京風俗図譜 1, 2, 東洋文庫 23, 30, 平凡社（1989 13, 11刷）1-P 141, 145; 2-P. 33, 56, 103, 109.
- 5) 崑岡等奉勅纂：欽定大清会典図 二, 三, 台湾中文書局（1963）P. 1718, 2037, 2172, 2184.
- 6) 沈從文 王予編著，吉田真一 栗城延江訳：中国古代の服飾研究 増補版，京都書院（1995）P. 466, 510.
- 7) 敦崇著 小野勝年訳：燕京歳時記，東洋文庫 83, 平凡社（1971）P. 187, 206.
- 8) 黄鋼 原娟娟 黄能福編：中華服飾七千年 3, 4, 清華大学出版社，北京（2011）3-P. 2, 4-P. 170.
- 9) Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum, (1956) P. 93.
- 10) 河口慧海：チベット旅行記 二，22刷，講談社（1993）P. 188.
- 11) 江本嘉伸：高原の皮舟，民俗学 24, 民俗学振興会（1983）P.114.